

Q ■ 若者の敬語

部下に週末の予定を聞いたら「テニスをさせていただき予定です。」という答えが返ってきたので、「何にでも「させていただき」を付けるものじゃない。」と注意しました。最近の若者は敬語を正しく使えなくなっている気がします。きれいな敬語を使いたいという気持ちがないのでしょうか。

A 若い世代は、敬語に対する意識が低いわけではありません。もし、敬語をうまく使えない若者がいても、ふだんから敬語を用いる環境になく慣れていないだけで、本当は、きちんと身に付けたいと考えているかもしれません。過剰な表現はそのような気持ちから生じているとも考えられます。

もう少し深く 若い世代の 100% が「敬語は必要」と考えているというデータも

「国語に関する世論調査」（平成 25 年度）では、「今後とも敬語は必要だと思うか」という問いに対し、98% の人が「必要だと思う（計）」と回答しています。そのうち、16 歳から 29 歳だけを見ると 100% という結果でした。20 代以下の若い世代も敬語が必要であると認識しています。

敬語はどこで身に付けられているのでしょうか。世論調査で最も多かった回答は「職場（アルバイト先を含む。）等での研修」で 63.5% でした。つまり多くの方が、仕事をする中で身に付けていると考えています。学生や社会に出て間もない人たちが敬語の使い方に苦労しているのは、当然のことであるとも言えるでしょう。

なお「させていただき」は相手側又は第三者の許可を受けて行い、そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に使われます。これらの条件に合わなくても、そうであると見立てて使う場合がありますが、状況によっては、自然な言い方として受け入れにくく、過剰な言い方と感じられるおそれがあります。

もっと深く 敬語を身に付けようと努力する気持ちを評価

文化庁が平成 29 年 3 月に実施したウェブアンケートで「言葉や言葉遣いについて、困っていることや気になっていること」として自由記述を求めたところ、敬語に関する回答が最も多く挙げられました。また、世論調査 Q3 で「敬語について難しいと感じることがあるか」を尋ねたところ、67.6% の人が「ある（計）」と回答しています。サービス業など第三次産業に従事する人の割合が高まり、敬語を使う機会は以前より増えました。敬語の使い方は多くの方にとって課題となっています。

近年、「(さ)せていただく」や「ございます」などを用いた過剰に丁寧な言い方が問題にされることがあります。その背景には、できるだけ丁寧な言葉遣いをしておかないと認めてもらえないのではないか、非難されるのではないかという意識や、できるだけ丁寧に言っておいた方が安心できるという意識があるとの指摘もあります。その結果、過剰な表現になり、かえって問題を指摘されるといった悪循環につながっているおそれもあります。

「敬語の指針」では、敬語を「相互尊重」を基盤とする「自己表現」として位置付けています。まずは、各自が敬語の明らかな誤用や過不足を避けるよう心掛け、敬語や敬語の使い方についての知識や考え方を身に付けることが必要です。一方で、他の人の言葉遣いに対しては、正誤を気にするよりも、敬語を使って話そうと努める気持ちに注目し、評価することが望ましい場合もあるでしょう。

参 考

「敬語の指針」（平成 19 年文化審議会答申） [「敬語の指針」で検索](#)

敬語に関する「よりどころのよりどころ」として文化審議会国語分科会が作成。特に「第 3 章 敬語の具体的な使い方」には、Q & A 方式で、敬語の実践的な使い方が示されています。

「敬語おもしろ相談室」（文化庁ウェブサイト） [「敬語おもしろ相談室」で検索](#)

「敬語の指針」に基づいた短編のムービーを通して、楽しく敬語を学ぶことができます。学校の授業や企業の研修などでも活用されています。

Q ■ 言葉の用法の変化

会議で「営業に対してもっと檄を飛ばしてほしい。」と発言したところ、後で上司に「檄を飛ばす」の使い方が間違っていたぞ。」と言われ、本来の意味を教えられました。書籍や新聞などでも私と同じ使い方をしているのをよく見ますから、決して間違いではないと思うのですが。

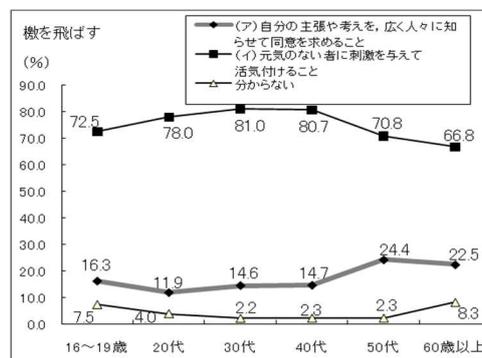
A 言葉の用法は変化することがあります。既に広く用いられ、辞書等でも取り上げられているような場合に、それを誤りであるとも考える必要はないでしょう。ただし、本来の意味を大切にしている人がいることに留意する必要があります。使い方に揺れが生じている言葉については、新しい用法が定着しつつあっても、誤解を避けるために、元々の意味を理解しておくといよいでしょう。

もう少し深く 新しい用法が定着しつつある言葉

元々、「檄を飛ばす」は、自分の考えを広く伝え、同意を求めたり決起を促したりするという意味の慣用句です。しかし、現在では「元気のない者に刺激を与えて活気付ける」の意味で使われることが少なくありません。

世論調査 Q20 でこの言葉の意味について尋ねたところ、72.9%の人が「元気のない者に刺激を与えて活気付けること」であると回答し、本来の意味を選んだ人は19.3%にとどまりました。右のグラフのとおり、新しい意味は全ての年代を通じて用いられています。多くの辞書も「誤って」、「俗に」などと前置きしながらも新しい意味を載せており、社会における使用状況を反映しています。

以上のとおり、「檄を飛ばす」という語の意味は、変化が進んでいるとも考えられます。新しい意味を一方向的に誤りであるとみなすのは行き過ぎでしょう。

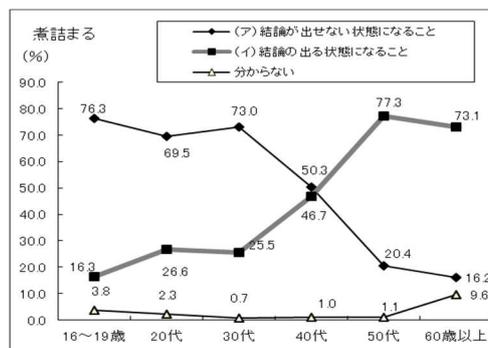


視点を変えて 意味の変化に注意が必要な場合

更なる注意が必要となる言葉もあります。例えば「煮詰まる」という慣用句を見てみましょう。「煮詰まる」は元々「(議論や意見が十分に出尽くして)結論の出る状態になること」という意味で使われていましたが、近年、正反対の意味、「(議論が行き詰まってしまって)結論が出せない状態になること」として用いられる場合があります。

世論調査 Q20 では、本来の意味で用いる人が56.7%であったのに対し、新しい意味を選んだ人は37.3%でした。元々の意味で用いる人がまだ多いものの、「結論の出る状態になった」ことを伝えつつも、全く反対に、「行き詰まっている」と受け取られているおそれがあります。

また、年代別に見ると右のようなX型のグラフになり、若い世代で意味の変化が進んでいる一方、年配の世代では、元々の意味が優勢であることが読み取れます。年配の人と若者との間での伝え合いなどにおいては、安易に使うことのできない言葉と言えるかもしれません。



参考

* 「檄を飛ばす」と同様に、7割以上の人が新しい意味で使っている慣用句等の例
「慥然」、「姑息」、「にやける」など。

* 「煮詰まる」と同様に、反対の意味で使われることのある慣用句等の例
「役不足」、「情けは人のためならず」、「流れに棹さす」、「気が置けない」など。

「言葉のQ & A」(文化庁ウェブサイト) [「言葉のQ & A」で検索](#)

「国語に関する世論調査」の調査結果などについて、Q & A形式で分かりやすく説明しています。

Q ■ 外来語など片仮名語の使い方

難しい外来語などの片仮名語はなるべく使わないように心掛けているのですが、「ガバナンス」や「インキュベーション」のように、どうしても和語や漢語では微妙なニュアンスまでを言い表しにくいようなものがあります。どうしたらいいでしょうか。

A 広く定着しているものは別として、外来語などの片仮名語を安易に使わず、分かりやすい言葉を用いる心掛けは大切です。ほかの言葉に置き換えることが難しく、余り知られていない片仮名語をどうしても用いる必要がある場合には、「ガバナンス(組織をまとめる上での管理・監督等の機能)」、「インキュベーション(注：起業家の育成や新しいビジネスの支援)」といったように、その言葉のすぐ後に意味を添えたり注を付けたりして、伝え合いを円滑にしましょう。

もう少し深く 「インキュベーション」が分かる人は1割に満たない

世論調査 で120の外来語の理解度や使用度を調査したところ、「意味が分かる(計)」と回答した人は「ガバナンス」で20.0%、「インキュベーション」で9.2%でした。これらの言葉を理解できる人は限られます。相手がどのように感じるかを十分に意識して、慎重に用いる必要があるでしょう。

もちろん、広く定着している片仮名語もあります。同じ調査では、「ストレス」、「ボランティア」、「キャンペーン」、「リサイクル」、「サンプル」など、9割以上の人々が「意味が分かる(計)」と回答した語が14ありました。こうした語は、そのまま用いても問題ないでしょう。ただし、高齢者や子供に向けた文書などでは、言い換えや注釈が必要な場合があるかもしれません。

なお、国立国語研究所「外来語言い換え提案」では、「ガバナンス」は「統治」、「インキュベーション」は「起業支援」等への言い換えが提案されています。

データを見る 不特定多数の人を対象とするときや話し言葉では特に注意を

日本語は、古くから外来語を取り込んで豊かになってきた言葉です。近代以降、一気に増加した片仮名語も、表現の幅を広げ、生活を活性化してきました。スポーツや音楽、料理に関する言葉などには、片仮名語でしか表せないものも少なからずあります。また、専門家同士の間などでは、片仮名語を用いた方がよりの確に伝え合えるような場合があるかもしれません。

しかし、片仮名語には、円滑な伝え合いを阻む側面があります。世論調査④Q7で「日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に出てくる外来語や外国語などの片仮名語の意味が分からずに困ることがあるか」を尋ねたところ、「よくある」(21.0%)と「たまにはある」(57.5%)を合わせた「ある(計)」は78.5%という結果でした。

特に、公の機関が一般の人々に向ける情報には、十分な注意が払われるべきです。世論調査②Q15で、「官公庁の広報やパンフレットなどを、分かりやすいものにするために、外来語・外国語については、どのようにするのが良いか」を尋ねたところ、「できるだけ使わない」が7.7%、「日常生活で使われているものだけに限って使う」が41.2%、「やむを得ないがなるべく注釈を付けて使う」が39.9%という結果でした。「積極的に使う」は7.1%にとどまっています。現在、国の府省による白書などにも、難しい片仮名語が使われる傾向があります。無反省に片仮名語を用いることなく、極力分かりやすい日本語に言い換え、それが難しい場合には、説明や注釈を付けることが必要です。

また、文書などを読んでいて分からない片仮名語にぶつかったときには調べることが可能かもしれませんが、話を聞いている場合にはそれができません。中でも、一方的に話すような説明や講演などでの片仮名語の使用には、より慎重になったほうがいいでしょう。

参 考

「外来語言い換え提案」(国立国語研究所) [「外来語言い換え提案」で検索](#)

公共性の高い文章で使われることの多い外来語を分かりやすく言い換えた語例集。